



ベトナムのコーヒー園（解説：裏表紙）

# 中学校 社会科のしおり

2012年度

1

(4月)  
学期号

帝国書院





(写真：帝国書院 2011年9月撮影)

## 表紙写真解説

### 躍動するメコンの昇龍 ～ベトナム最新事情～

帝国書院取材班

最近日本でもお馴染みのベトナムのコーヒー。現在ではブラジルにつぐ世界第2位の生産国（2009年、約118万t）となっている。そのベトナムのコーヒーの里を訪ねるため、南部の高原地帯へ向かった。ダラット空港周辺の丘陵地に延々と広がるコーヒー農園を見て、あらためて世界第2位の生産国であることを認識した。

われわれが取材したコーヒー農園（表紙写真）は、ダラットからさらに2時間半ほど離れた場所にあった。農園主はホーチミン出身で、夫人と二人暮らし。広大な農園（8ha）を数人の出稼ぎ労働者と管理している。おもな輸出先はアメリカ合衆国、ヨーロッパ、日本だという。

農園主によれば、ベトナムは農地が少なく、人件費も上がってきており、近隣のラオスやカンボジアへの進出を検討していた。

今回の取材の大きな目的はメコンデルタの空撮である。ホーチミンの国内線空港からヘリコプターをチャーターし、南西部の都市カントーを目指し撮影にのぞんだ。

空から眺めるメコン川—世界有数の穀倉地帯を悠然と蛇行しながら流れるその様は圧巻だった。日本では決して見ることができない光景である。雨季（9月）だったこともあり、水量は多く、急に蛇行している場所では

川が氾濫し、水田にあふれ出している場所がいくつか見られた（写真①）。

ベトナム最大の都市ホーチミンでは、日系企業の広告を頻繁に見かけた（写真②）。ただし、日系企業の工場はおもに首都ハノイ周辺にある。ガイドによれば、昔から商業が発達していた南部と比べ、近代化が遅れているハノイなど北部地域に国策として企業誘致しているとのことだった。また、韓国系資本が南部地域を中心に多いことが印象的だった。

ベトナムの朝のラッシュは、新興国の例にもれず、大変混雑している。とくにバイクの量の多さときたら、われわれの想像を超える迫力である。一台のバイクに2～4人乗っているのも驚きだった。今後さらに発展して、バイクが自動車に変わったら、今の道路事情では間違いなく対応できないだろう。

ベトナムの朝は早い。学校も7時半には授業が始まっている。夫婦共稼ぎも多いことから、ベトナムでは朝食は屋台ですませるのがあたり前だという。ハノイの宿泊先近くの屋台でも、通学途中の小学生、中学生くらいの子もたちがフォーを食べていた（写真③）。

ベトナムの食卓（写真④）の中心は米である。日本人好みの味つけの料理も多く、食べものめあてでベトナムに観光に行く日本人が多いこともうなずける。